インタビュー

原爆投下で心に葛藤

交流を通し和らぐ憎しみ

まず謝罪の気持ち表して

元英戦争捕虜の癒しと日英和解に取り組む　恵子・ホームズさん（52）

＜戦時中、東南アジアや日本国内にあった収容所などで日本軍に虐待された捕虜が、苛酷（かこく）な労働を強いられた元英兵や遺族を連れて訪日し、市民との交流や日本文化を理解してもらう活動を続けている。開始から八年。日本人を知り、半世紀以上も抱いてきた憎しみ、苦しみが消えて打ち解ける元捕虜が後を絶たないという。長崎の協力者と今後の進め方を話し合うため来崎した＞

※――※古里の活動が端緒

ホームズさん　私の古里の三重県紀和町にあった銅山で戦時中働かされて亡くなった英国人捕虜十六人のため、地元の人々が立派な墓を造り弔っている。このことを遺族やここにいた元捕虜に知らせたり、連れて来れば、心が癒（いや）され、忌まわしい思い出に悩まされることもなくなるのではないかと思った。一九八八年のことだ。

―すぐ軌道に乗りましたか。

実現するまで四年かかった。元日本軍捕虜の追悼式と親ぼく会（全国捕虜大会）が九一年、ロンドンで開かれると知り、紀和町にいて帰国した元捕虜や遺族を捜すため会場へ行った。大会が始まる前、ロビーで自己紹介をすると「帰れ！日本人なんか大嫌いだ」とば声を浴びせられた。会場には千人ほどの元捕虜たちがいた。やり場のない苦しみや心の痛みを持つ姿を目の当たりにして、この人たちのため働くのが私の使命と確信した。

―苦労したことは。

「日本に行くつもりはない。日本には何の興味もない」「日本に行くことは捕虜仲間を裏切ることになる」として慎重になる元捕虜たちを、家まで訪問したりして懸命に説得した。「昔の日本人と違う」「日本へ行けばふっ切れる」と。

―資金の工面は。

日本企業に資金援助を依頼すればみんな大いに賛成してくれると思ったが、現実は意外に厳しく、九二年の最初の訪日では英国航空が最高の援助をしてくれた。最終的にはロンドンにある日本のマスコミ支局が私の計画を取り上げてくれ、日本全国から励ましと募金が相次いだ。日本企業も次第に援助してくれるようになった。

＜「伏せていたのに蓋（ふた）を開けるな」などと日本人からの嫌がらせも受けたが、クリスチャンとしての信仰が活動を支えている。

※――※広島、長崎も訪問

―日本での活動内容は。

紀和町などでの追悼式やレセプションだけでなく市民と広く交流の場をと、ホームステイや家庭訪問もするようになった。三回目からは被爆者の苦しみ、願いも理解してもらうため広島、長崎を訪ねることも加えた。長崎では原爆落下中心地で追悼式をし原爆資料館を見学。被爆者とも接した。

―被爆の惨状を目の当たりにするわけですが。

連合軍が日本に上陸したら日本や東南アジアにいるすべての捕虜が日本兵に殺される運命だと知っていた。「半殺しにされるから（捕虜大会には）行くな」という英国の知人の忠告にもかかわらず敢行したのは「レッツ　ゴウ（一緒に行こう）」という神の声を信じたから。「人間の欲望や征服欲が戦争に走らせているのに、人間はその責任を神に転嫁する性癖がある」＞

「日英の和解活動は私の使命」と語る恵子・ホームズさん　＝長崎市城栄町、ＥＳＡ

―被爆者とも接し彼らは、原爆投下で救われたと思っていたのに、罪のない市民が悲惨な目に遭っていたのを知って心に葛藤（かっとう）を起こすようだ。当時の連合国の一員として、原爆を落としたことを謝る元捕虜もいた。

―日本の東南アジア占領は正当化できませんが、英国も植民地にしていた歴史があります。

虐待を受けた彼らに日本人が謝ることで、「英国は大英帝国時代にもっと輪を掛けて悪いことをしていた」と反省の気持ちを率直に表す人もいる。それは原爆問題にも関係することで、日本人が原爆の被害ばかり訴えても、向こうは身構えてしまう。心を開いてまず「悪かった」と謝罪することだ。

―インドネシアでの戦争に関するオランダの企画展開催打診を長崎市は断りました。

イギリスの戦争博物館では原爆投下のことも展示して戦争を多面的にとらえている。長崎市の原爆資料館が原爆以外の戦争被害者のこともきちんと展示すれば、他の国の人々は日本を評価し原爆に関することももっと理解してくれると思う。

※――※強い家族の苦しみ

―元捕虜らは日本に来てどう変わりますか。

それまでの苦しみがすっかりなくなり、自分の絵を売った代金を活動資金に寄付してくれる元捕虜もいる。帰国後、「アイ　ラブ　ジャパニーズ」という言葉を口にするのも聞いた。

―元捕虜たちは高齢になっていますが

父親を日本人に殺された息子や娘たちの憎しみの方が、元捕虜たちの気持ちより想像以上に強い。そうした遺族たちの態度も活動で少しずつ変わってきたが、まだまだ続けねばならない。

＜英国には三年前、約二万人の元捕虜がいたとされる。中には日英両国政府や、戦時中に捕虜を使役した日本企業に補償を求めている元捕虜もいる。これまでの活動で訪日した元捕虜や遺族らは延べ二百人以上。当初、傍観していた日本政府も資金援助するようになったという。活動は広がりをみせている＞

（聞き手・石田謙二）

略歴

日本で知り合った英国人と結婚し1979年からロンドンで生活。84年に夫を飛行機事故で亡くすが2人の子供を育てる。日英和解活動の母体であるチャリティー団体「アガペ」（ギリシャ語で「無条件の愛」の意味）の責任者。98年には活動に対しエリザベス英女王から勲章を受けた